

童話 吃驚仰天

——ドンちゃん——

水谷年恵子

一

暑い暑い晩でした。ドンちゃんは家の中で寝るのはいやだと言つて、野原の真中へ行つて寝ました。一面に生えてゐる青草の上へ、ごろりと寝ころぶと、ひやりとして好い心持です。空には美しい星が降る程光つてゐます。涼しい風が天から吹いて來ます。草の中で色々な蟲がいゝ聲で歌を歌つてゐます。ドンちゃんは、

「あゝいゝ氣持だ。」

と言ひながら、朝までぐうつすり寝てしまいました。

眼が覺めると、お天道様が頭の上でかんく照

つてゐました。ドンちゃんは跳起きて駈出しました。ドンちゃんが眠つてゐる中に、鈴蟲や、轡蟲や、機織蟲がドンちゃんの着物の中へ、澤山這入つて來ました。ドンちゃんはそれを知らずに家に歸りました。

ドンちゃんの歸つて來るのを待つてゐたお父さん、お母さんは、ドンちゃんを見ると、

「こらつ。」

と言つてどなりました。すると、

リン、リン、リン、リン。

ドンちゃんの背中が鈴蟲が鳴出しました。

懷の中で機織蟲が、

スイツチヨン、スイツチミン。

お腹の所で轡蟲が、

ガシヤ、ガシヤ、ガシヤ。

と鳴出しました。澤山の鳴く蟲が一時に聲を揃へて、

リオン、リオン。

スイツチヨン、スイツチヨン。

ガシヤ、ガシヤ、ガシキ、ガシヤ。

と鳴立てるので、お父さんもお母さんも吃驚、ドンちゃんも眼をばちくり。

お父さん「ドンちゃんが松蟲になつたあ——」

お母さん「ドンちゃんが轡蟲になつたあ——」

ドンちゃん「ドンちゃんが機織蟲になつたあ——」

## 二

暑い暑い晩でした。ドンちゃんは家の中で寝られないと言つて、川端へ行つて寝ました。川端に

は芦が茂つてゐて、涼しい川風が吹く度に、

サワ、サワ、サワ。

と鳴りました。空には十五夜の月様が照つて、流れて行く水が金色に光りました。

「あゝ、氣持だ。」

と言ひながら、ドンちゃんはぐつすり寝てしまひました。

ビカーリ、ビカーリ。

川端には澤山の螢が飛んでゐました。夜が更けると、螢は疲れて、皆ドンドンちゃんの頭や着物に止つて、羽を休めました。

一匹の螢がドンちゃんの鼻の穴の中へ這入りました。ドンちゃんの鼻が、ヒクツと縮むと、大きくしやみが螢と一緒に、

ハツクシヨン。

と飛出しました。ドンちゃんは自分のくしやみに吃驚して眼を覺しました。

月の光で濡れたやうに見える芦の葉が、川風に吹かれて、

サワ、サワ、サワ。

と鳴つてゐます。

「あ、此處は川端か。」

早く家へ歸らないと、又お父さん、お母さんに叱られます。ドンちゃんも夜の明けない中に、急いで歸つて來ました。

そつと家の中へ這入つて來て、暗がりの中を手で探つて、自分の寢床へ横になりました。するとドンちゃんの顔や着物に止つてゐる螢が一時に、

ピカーツ、ピカーツ。

ピカーツ、ピカーツ。

と光り出しました。ドンちゃんは吃驚仰天、眼を覺したお父さん、お母さんも吃驚仰天、

お父さん「ドンちゃんが佛様になつたあ——」

お母さん「ドンちゃんが佛様になつたあ——」

ドンちゃん「ドンちゃんが佛様になつたあ——」

### 三

暑い暑い晩でした。ドンちゃんは家の中で寢たくなひと言つて、山へ行きました。山のお花畑には、よい香の花が一ぱい咲いてゐました。トンちゃんはお花の上へごろりと寢ました。

「あゝいゝ香だなあ。」

ドンちゃんは鼻をひこ／＼させながら、ぐつすり寢てしまひました。ドンちゃんは眠つてゐて、涎の垂れそうな香をかぎました。

舌のとけさうな香をかぎました。

頬べたの落ちさうな香をかぎました。

ドンちゃんはあつちへごろり、こつちへごろりころがつて、

「あゝうまい。」

「あゝあゝいしい。」

と寢言を言ひながら眠つてゐました。ドンちゃん

の顔も、着物も、手も、足も花の香や、花の蜜が一ぱいに着きました。

その中にドンちゃんはお花の中に寝てゐた蜜蜂の上へごろりところがりました。蜂がちくりとドンちゃんを刺しました。

「あ痛つ。」

ドンちゃんは眼を覺して駈出しました。家へ歸つてこつそり寢床へ這入ると、又眠つてしまひました。朝になつて、ドンちゃんが表へ出ると、

ブーン、ブーン、

ブーン、ブーン、

蜜蜂が澤山飛んで来て、ドンちゃんに止りました。

ヒラ、ヒラ、

ヒラ、ヒラ、

蝶々が澤山飛んで来て、ドンちゃんに止りました。

ズロ、ズロ、  
ズロ、ズロ、

蟻が澤山ドンちゃんの體へ這上りました。顔も着物も、手も、足も大變です。

ドンちゃんは大聲あげて泣出しました。お父さん、お母さんも大聲立て、騒ぎました。

ドンちゃん「ドンちゃんが花になつたあ——」

お父さん「ドンちゃんが砂糖になつたあ——」

お母さん「ドンちゃんが菓子になつたあ——」

#### 四

暑い暑い晩でした。ドンちゃんは家の中では寢られやしないと云つて、池の端へ行ききました。柳の木が一本、池の水の上へ體を差出してゐました。ドンちゃんはその木の上へ乗つて寝ることになりました。今夜も月夜です。

柳の葉の間から、お月様が、ちら／＼見えます、

ピロロ、ピロロ。

遠くの方で誰か笛を吹いてゐます。夜風に、糸のやうな柳の枝が、ゆうらり、ゆうらりと揺れてドンちゃん顔を撫てます。ドンちゃんはいゝ心持になつて、ぐつすり眠りました。

ボツチャーイン。

夜中にドンちゃんは池の中へ落つてきました。夢だか、夢でないのか、ドンちゃんにはわかりません。池の水の中で眼をつぶつたまゝ考へて見ました。

夢かな！

夢でないかな？

どうもわかりません。顔を水の上へ出して、眼を明けて見ました。ぼんやりと見えるのは柳の木です。

「あゝ柳の木から落つてつたのか、さうか。」

ドンちゃんは池の中から這上りました。

家へ歸つたら、夜が明けました。お父さん、お

母さんが起きて来て、どならうとすると、ドンちゃんの懐の中のら大きな鯉が、

ビーン。

と躍出しました。脇の下から赤い金魚が、

ビチ、ビチ。

と飛出しました。裾の方から泥鰌が、

ニヨロ、ニヨロ。

うなぎが、

ニヨロ、ニヨロ。

三人とも吃驚して、

「ドンちゃんが魚に化けたあ——」

## 五

ドンちゃんはもう遠くへ行かず、今夜は家の前へ筵を敷いて寝ることにしました。土の中から出て来たカナブンが、寝てゐるドンちゃんの鼻の頭に止つてゐました。墓が、

ノソリ、ノソリ。

と這つて来て、そのカナブンブを嘗めて食はうと  
してゐます。すると、お腹のすいた黒猫が、眼を  
光らせてその墓に飛掛らうとしてゐます。黒猫の  
後には、いぢ惡のブル犬が黒猫を睨んでゐます。

墓が、カナブンブの方へべろりと舌を出した時  
黒猫が、素早く墓に前脚を掛けました。ワンと其  
の時、ブル犬が黒猫の尻尾を引ばりました。そし  
てドンちゃんの鼻の先でカナブンブと、墓と黒猫  
と、ブル犬とが大戦争を始めました。

ブン、ブン、

キコ、キコ、

ニアゴ、ニアゴ、

ワン、ワン、

この騒ぎに、ドンちゃんは吃驚仰天、

「うわーっ。」

とばかり飛起きて、家の中へ駈込みました。お父  
さん、お母さん眼を覺して、

お父さん「ドンちゃんどうした。」

ドンちゃん「ブン、ブン、キコ、キコ、ニアゴ、

ニアゴ、ワン、ワン。」

お母さん「ドンちゃんどうした。」

ドンちゃん「ブン、ブン、キコ、キコ、ニアゴ、

ニアゴ、ワン、ワン。」